

---

土

慈牟

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

土

### 【ZPDF】

N4207D

### 【作者名】

慈牟

### 【あらすじ】

彼は彼女を土のよつだと思っていた

(前書き)

私は土の上に存在する

土という字を書く時、彼が思い描くのは血だった。  
土と血の関連を私達は理解できないが、今から私が説明していく。

彼は彼女を知っていた。

彼女は沈黙で、身動きすらしないような印象だった。  
まるで土のようだ、と彼は思った。

人を指す言葉にはほど遠いが、これは彼女にぴったり当たる唯一の言葉だ。

温もりもなく、墓石の冷たさもない。

その上金属のような輝きも鋭さもなく、水のように手を滑り抜けて流れることはない。

生ぬるくて、不揃いな角と丸みを持った、なんとも形容しがたい姿は土そのものだった。

もちろん、彼女は人間だ。

平温は少し低い方だと語りくらいで、私達と大した差はない。

それでも、彼は彼女を生暖かいと表現するよりも冷たい、けれど強いて低温でもないと感じていた。

他の人が彼女についてどう感じていたか。

それはここでは語られない。

彼女は時に、液体でも固体でもない、どんどんの泥水だったり、少し湿った程度の土だった。

完全に干からびた土の時もある。

それでも、常に瘦せた土地の土壤を思っていた。

決して、栄養を含んだ黒土のようではなく、生き物が死に絶える地面のようだった。

そんな土と彼は、いつの間にか隣に居合わせていた。

足で踏みつけるでもなく、寄り添う訳でもなかつた。

彼女はあまり喋らなかつたため、いまだに彼は彼女の性格はおろか、名前すら知らずにいた。

彼女が口にする言葉は以下の三つだけだつた。

「寒い」

「暑い」

そして、最期に「赤」と。

彼女には何か生まれつきの障害か持病があつたのかも知れない。その名の通り、土氣色の肌が赤みを帯びるのを彼は一度も目にしたことはなかつた。

他の人もそうだろう。

そもそも、彼女の存在は彼以外に認識されていたのだろうか。彼には分からぬ。

彼女は、土は存在していたのか。

ある日、赤みがかつた空に赤い朝日が映し出された頃、彼は土を見つけた。

やせ細つた骸骨のような身体は華奢という表現を超えていた。

彼とおおよそ同じ色調で存在するはずの彼女は、なぜか薄く見えた。

彼はとつさに空を連想した。

死んだよつな白い空。

いや、白ではない。

少し灰色がかつた、何とも言えない色。

無限にある色の中で、最も印象の薄い色だ。

彼は何か話しかけたのを覚えていた。

それが「おはよう」だったのか、「こんなにちは」だったのかは覚えていない。

地面と彼女の靴が擦りあつ音だけが、その存在を示しているようだつた。

彼女は無言だつた。

生きているのか、死んでいるのか・・・そう考えた時、彼の頭に浮かんだのが土という言葉だつた。

彼は彼女の手を引いた。

冷たいと感じ、次に温かさを少し感じた。

彼女はそのどちらでもなかつた。

彼を振り返つた彼女の動きは駒撮りで撮られたアニメーションのようにぎこちない印象だつた。

再び彼は彼女の生死を疑つた。

彼は彼女を家に連れ帰つた。

彼はどうやって家まで土を運んだのかも覚えていない。

手を引いていたか、黙つて彼女が付いてきたのか、無理矢理連れ込んだのか。

まるで靴底にいつの間にか付着した土のように、彼女は彼の部屋にいた。

その時、彼は彼女の沈黙を楽しんでいた所だった。

音もなくソファに腰掛ける彼女の足元を見て、彼はいつの間にか靴脱いでいた事に気づく。

その時、初めて彼女が口を開いた。

「寒い」

その声を彼はもう覚えていない。

低くも高くもない声が彼女の姿にぴったりだつたと言つべからいしか。

彼はぎこちなく、彼女を抱きしめた。

しばらくそうしていると、突然奇妙な気持ちになつた。

我に返つた彼は、彼女がその瞬間自分で下で身動き一つせずに横たわっていることに気が付いた。

いつの間にか、一糸まとわぬ姿になつていた彼女を見ても、彼はそれが裸だと気づかなかつた。

服を着っていても、着ていなくても同じように見える人なんてそういうもんじやない、と彼は冷静に考えた。

覚えていなかつたが、彼は一度彼女と確かに繋がつていた。彼女の手が感じないほどの力で彼を押し返す。

「暑い」

彼女のその言葉は彼にとつて奇跡のようだつた。

生きているのか、死んでいるのか分からぬ土が言葉を紡ぐのを彼は耳にし、その脣に目を走らせた。

まるで、田の端で背後の物陰を追う時のようにだつた。

動いた気がする・・・動いたんだ、絶対に。

具体的にいつ彼女が現れ、どのぐらいの日数を彼と共にしたのかは全く謎だつた。

一時間なのか、10年なのか。

確かなのは、彼は彼女といふ間ずっと彼女だけを見ていたと言つこと。

飲み食いをせず、風呂も入らず、歯も磨かず、用も足さずにその時間を彼は彼女と過ごした。

一時間なら驚くことはないし、十年なら超自然現象とも言えるが、それは定かにならない。

「赤

「えつ？」

彼女の三つ田の言葉に、彼は驚きの声を上げていた。

本当に赤がそこにあつた。

何色とも言い難かつた彼女に赤が生まれている。

それも、床一面に。

その赤は一見血のようだった。

今でも、彼はそれを血と認識しているが、実際は血ではなかった。その血のような赤は液体でも、固体でもなかつた。

赤土、と見れば別のものを連鎖しがちだが、それを文字にするなら、これが適當だろう。

鮮血のように赤いそれは、確かに土だった。

彼はそれを摘んで手のひらで感じた。

感触は土そのものだつた。

その時、土は冷たかつた。

その数日後、血の海に座り込んでいる彼を私は見つけた。

私は驚いて彼に駆け寄ると、彼が手に握っていたのは土くれだつた。血で濡れた手のひらを見るのはそう、珍しくもないだらう。

血まみれの土くれを握っていた彼に比べれば。

私は彼の手から、とつさに土くれを払おうとした。

が、よくよく見てみると、彼の手から土くれが少しずつ、湧き上がるようになってきた。

もちろん、目を疑つたが、確かに出ている。

私は何も言えなかつた。

ただ、血の海の床に腰を下ろし、突然話し始めた彼に耳を傾けた。

話が終わると、目の前の光景は少し変わっていた。

血の海の中に既に彼の姿はなく、こんもりと土が山盛りになつている。

私はその山を手で崩して探つてみたが、何も見つからなかつた。

彼は彼女を土と形容したが、私も彼を土と呼んでいた。

目の前で彼が土に還つたからだけではなく、少し離れたところに何の変哲もないボールペンと紙が落ちていたからだ。

紙はぐしゃぐしゃの線で塗りつぶされていて、手に取つてみると、何回、何千回も、土と書き殴られていた。

(後書き)

私は土の下に眠っている

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4207d/>

---

土

2011年1月19日07時56分発行